



写真提供：シカゴ大学

## 南部陽一郎の 独創性の秘密をさぐる(2)

西村 肇

「独創的に生きたい」と思ってこの論考を読む若い読者にとって関心があるのは、若いときの南部、研究の道に踏み込んだばかりの南部、自分を待つ世界が一切見えず、見えるはずもなかった南部でしょう。その南部はその時点ですでに一人前の研究者であったといわれていますが、それがどうであったのか、南部が大学卒業後初めて書いた研究論文と周囲の状況も含めて丁寧に調べることによって、南部の独創性の秘密に迫りたいと思います。研究者の生涯の仕事はその処女作の中に萌芽的な形ですべて含まれているともいわれるからです。

最初の研究というと卒業研究ということになりますが、南部が出た東京大学の物理学科には、昔も今も卒業研究の制度はありません。南部が卒業した1947年ごろは卒業するとすぐ一兵卒として召集され、戦争に投入されました。ただし理科系で成績優秀なものには、技術将校になり戦場に出ないですむ道が残されていました。南部はどういうわけかこの道をとらず、一兵卒として軍隊に入りましたが、運よく前線に出ることをまぬがれ、1945年8月の敗戦で、東京に戻って来ました。

東京に戻ったあとは2~3年は大学に住んでいました。まったくの焼野原になった東京では、ほかに寝る所がなかったからです。寝るといっても着の身着のまま、研究室の机の上でした。身分は、大学院特別研究生とよばれていましたが、これは就職できない人にわずかな手当を払うための名前であって、大学院の講義などはまったくありませんでした。南部の仕事はこんな中で始まりました。

### 敗戦直後の2年間

敗戦直後2年間の空腹と無法とみじめさはどんな意味でも今の人々の想像を超えたものです。ヤミ食糧の売買は厳しく罰せられたのに、法律に忠実にヤミ食糧を食べなかった裁判官は餓死しました。人々は食べるためだけに全部の頭と体を使っていました。私の場合、外地での敗戦後は、盗みと乞食だけで1年間生き抜いて、日本に帰って来たあとは1年間まったく学校に行かず、ヤミ製塩で生きました。2年の空白に目をつぶって受入れてくれたT学園にも

授業料と寮費はヤミの塩で払いました。

こんな状況の中でこそ、人の生きる姿勢の本音があらわれるのだと思います。そして、そこであらわれたわずかな違いが後年、決定的な差になってあらわれるのだと思います。朝永は、敗戦直後の極端な混乱期に、理研<sup>いほう</sup>発表論文を正確に英訳し、1946年の*Progress of Theoretical Physics*誌のvol. I, No.2に発表しています。食糧がなく創造的仕事をするだけの気力がなかったので翻訳をしたと語っていますが、この時期のこの努力こそが、ノーベル賞を引き寄せるのに決定的だったと思います。

軍隊から帰った南部は、この時期、奥さんのいる大阪では暮らさず、職もないのに東京大学の研究室に住み込み、生活をしています。給料なしですから相当時間は、アルバイトとヤミ食糧調達に費やしたのですが、それでも研究室に住んでいるのですから、徹底して物理の勉強に集中したと思います。私の経験では、空腹もそれを助けたらうと想像します。私の場合は学校に行かなかった2年の空白を半年間の寮生活の間に戻しましたが、そのおもな理由は、配給食糧だけの寮の食事からくるたまらない空腹を忘れるには、必死の勉強への集中しかなかったからです。極端な空腹に耐えるには精神的な問題に精神を集中させることが一番であり、それが勉学には非常な効果があるからです。

ただし、極端な精神集中を数週間、数カ月と続けるためには、絶えざる刺激が必要です。刺激として一番よいのは、斜め上の人との対話です。斜め上とは、師弟とか先輩とかの上下関係ではなくて、実力では上の人という意味で